

自他関係から見た対人恐怖的心性についての一考察

林 郷 子

A Study on the Anthropophobic Tendency
from the View Point of the Relationship between Self and Others

HAYASHI Kyoko

問 題

我々は、社会の中で生きていく以上、他者の存在を無視することはできない。そもそも人間は「本質的に社会的存在」(梶田, 1988)なのであり、生存のためにも何らかの社会組織の中に自らを位置付けなくてはならないし、第一本当の意味で“人間”になるためには、人間社会の中で他の人たちとの接触による社会文化的な学習をしつつ成長発達することが必要である。従って、他者との間に一定の関係を保っていくことは必要不可欠なことといえる。そして社会的存在であるからには、その社会の中の役割体系に組み込まれざるを得ず、自らの役割に合うと周囲から期待されるような態度や行動を、ある程度は身に付けることが要請される。しかし同時に人は「個性的存在」でもある。そのような役割は抜きにした“私は私という人間である”という意識を持つ。自分独自のあり方を追求し、自らに固有の何かを実現させようとする側面を有しているのである。「社会的存在としての必然性に支えられつつ、個性的な存在へと向かって限りなく希求する、というのが人の本質のあり方」といえる。

「社会的存在」と「個性的存在」というこれら二つの存在様式は、人間存在の二律背反ととらえられており、どちらも人間存在にとって必要な側面であるが、概念としては確かに対立矛盾するものである。従って、社会や他者の期待するところと自己の欲するところが対立した場合には、他者を取れば個人的な欲求や感情は抑えざるを得ず、反対に個人の意志や欲求を前面に出していけば他者の期待を無視することになり、他者か自己かのどちらかの選択を迫られることになる。選択の決定には様々な要因が働くと考えられるが、その人のパーソナリティも無視できない要因の一つであろう。「社会」と「個人」の二側面を軸としたパーソナリティの研究は多くなされている。例えば Snyder (1974) は、人が行動を決定する際に、内的なものを手掛かりとするか外的なものを手掛かりとするかを基準として、セルフ・モニタリングという概念を提唱した。セルフ・モニタリングの低い人の方が行動に一貫性があり、高い人は周囲や状況に合わせて自己の行動を変えるとされている。伊藤 (1993) は、発達論・適応論の観点から個人志向性と社会志向性という概念を提唱している。前者は独自の個性を重視し内的な基準を準拠とする特性であり、後者は社会適応や他者との協調性を重視する特性である。また、愛着と分離という観点から

Gilligan (1977) は「一体性と分離性」を定義した。一体性とは「愛着の発達に基礎づけられ、他者への共感や思いやり、世話行動など、他者と一体化した関係によって定義される自己 (connected-self)」、分離性は「分離・固体化の発達に基礎づけられ、他者とは分離し、自律的存在として定義される自己 (separated-self)」である。このような諸概念は、それぞれ定義している内容に違いはあるものの、社会的存在と個性的存在という自己の二面性の観点から考えて、密接に関連し合っていると思われる。そして、より前者が強調された特性としては、他者との協調を求めると共に他者に合わせて自分の態度を変える側面が、より後者が強調された特性としては、他者からの分離を求めると共に他者に左右されない態度の一貫性を持つ側面が考えられる。ただし、どちらも人間の根本的な存在様式である以上、どちらか一方だけを掲げて生きていくと人間関係に支障をきたす恐れがある。個人志向が行き過ぎればエゴイズムな面が前面に出て社会から浮くことになるし、他者志向が行き過ぎれば一方的な依存など未熟な対人関係を呈することになる。従って自己と社会あるいは他者との間の調和と対立、乖離と融合という二律背反的な関係は、一時的に一方を選択することはあるにせよ、全体的には継続していくものと考えられる。しかし先にも述べたように、社会の一部として要請されるものと個人的な感情や思考の間にはずれが生じるのが常である。このずれが葛藤を引き起こし、二つの方向へ引き裂かれることで不適応に陥ることも少なくないのではないだろうか。従って、この二側面のバランスをどのように取るかということが、社会生活を営む上で重要な課題となってくると思われる。

個性的側面と社会的側面の葛藤の病理として、対人恐怖症が考えられる。対人恐怖症とは「日本に非常に多く、また思春期、青年期に非常に多く見られる神経症の一種」(永井, 1994)であり、対人状況で、周囲に対する自分自身の在り方について悩む病である。思春期・青年期は、アイデンティティのテーマが主題となり、“自分とは何者か”と見つめだす時期である。個性化は青年期の大きな課題といえる。それと同時に社会的な自己についても見つめ直し始める時期であり、他者から受け入れてもらえるかということについて敏感になってくる。自己と他者との間に大きく関わってくる時期といえよう。対人恐怖症者が、この自己と他者との相反する二重の自己意識の間で葛藤に陥っているという指摘は、多くなされている。例えば、近藤 (1977) の「自己主張的要請と配慮的要請」、河合 (1976) の「個の倫理と場の倫理」、内沼 (1977) の「我執的方向性と没我的方向性」などである。いずれも、自己を他者から切り離し、自らの個性を重視するか、自己を他者の中に埋没させ、自己よりも他者や自己の所属する集団の方を重視するかという点では、共通していると思われる。対人恐怖症者がいわゆる“中間状況”や“半知り”を苦手とすることも、全てこれら二つの意識に引き裂かれる結果と考えられている。

これら二つの意識の間で生じる感情として、羞恥が挙げられる。内沼 (1977) は羞恥を「自己と他者の構成する時空間的な『間』に生じるもの」と定義している。また、作田 (1967) は「羞恥が生じるのは、普遍者として取り扱われるはずの状況のもとで固体として注視されたり、固体として取り扱われるはずの状況のもとで普遍者として注視を受ける時だ」として、羞恥の中間的な性格をよく表している。それならば、自己と他者の「間」を感じない人、つまり、自己あるいは他者に意識が偏ってしまっている人では、羞恥は生じにくいと考えられないだろうか。対人恐怖とは羞恥の病理であり、羞恥の生じにくい人には対人恐怖のような葛藤も少ないと思われる。しかし果たしてそのような人々を適応群と考えてよいものであろうか。

内沼(1977)は分裂病、躁鬱病、対人恐怖症のそれぞれにおける自他の構造について論じている。それによれば、分裂病では、他意識過剰なため他者が脅威となり、自分に救いを求め、他者を遮断して自閉的になる。病前は他人よりも自分を優先するような対自性優位な気質をしている。躁鬱病では、自己の空無化、自己喪失という点に関して自意識過剰となっている。他者なしには自己は存立し得ず、他者に同調しようとする。病前は、自分よりも他人を優先するような、対他性優位な気質となる。そして対人恐怖では、自意識、他意識ともに過剰であり、自己と他者の間で振り回されることになる。対人恐怖においては、自己と他者は等価的な価値を持っているのである。更に内沼は、分裂病と躁鬱病の病前では、対人恐怖に見られるような羞恥を巡る明確な葛藤や、対人過敏は見出だすことができず、それを覆っているのは前者は対自性優位の気質、後者は対他性優位の気質なのではないかと論じている。例えば躁鬱病の場合、一つの職場の秩序に適応し、ある役割に安住している限りは、対人過敏に悩まされることは少ない。その役割パターンが崩れた時に表面化してくる。また、分裂病の場合は、自閉によって対人過敏を遮断している。分裂病の場合、役割パターンの崩壊ではなく、そもそも役割を確立できないところから表面化してくるのである(木村, 1978)。このような自他構造は、自他の対立葛藤や羞恥のないところに存在する問題点を考える手掛かりを与えてくれるように思われる。

日本は元々は他者志向の強い文化であった。内沼が対他性優位な気質では対人過敏は表面化してきていなかったと指摘しているように、自己志向よりも他者志向が美德とされていた間は、人々はそれほど対人恐怖的な葛藤を感じていなかったのかもしれない。木村(1983)は対人恐怖の心性の低い人には「調和型」と「埋没型」がいるのではないかと推測している。調和型とは、自分が確立された後に集団ともバランスを取りながらいわば「和して同ぜず」生きているタイプであり、埋没型とは、自我の輪郭は曖昧であるが集団の中にいる限り不安なく適応しているタイプで、Marcia(1966)のいう自我同一性の早期完了(foreclosure: 同一性の危機を経験せず親や社会の意見を取り入れてあっさり目標が決まってしまう状態)の状態における安定を示しているのではないかと述べている。埋没型の問題としては「個」を持たないことが考えられるのだが、そもそも「個」を持とうとか出そうという意識が働かないため、彼らは葛藤も感じないでいられるのだろう。対人恐怖症者は、河合が「場の倫理」と称した日本の文化の中で、西洋に見られるような、個人の成長、個人の自我の確立に高い価値観をおく「個の倫理」を無意識内に強く感じるから不適応を起こしているものであり、日本の場合、最初から「個」の意識を持たない埋没型の方が、元々は適応群と考えられていたのかもしれない。戦後の西洋文化の流入に伴って、日本の文化にもかなりの変化が起こってきたといえる。羞恥を忌避し、「場」よりも「個」を重視しようという考え方が増えてきた。埋没型の問題が指摘されるようになったのも、自己志向をよしとする風潮を受けてのことであろう。

羞恥の働きも、以前はもっと positive に捉えられていた感がある。例えば作田(1967)は、羞恥の「個人の創意や自発性の表現を押さえ付けるというマイナスの効果」を認めつつも、自己顕示に限界を画し「広汎な連帯を可能にする作用」も持つとしている。河合(1976)は「場の平衡状態を壊しそうなとき、自分の心の中に生じる羞恥の感情によって規制される」と述べ、日本のように場の平衡状態の維持に高い倫理性を置く社会では「自己の欲望を満足させつつ、なおそれが場の倫理に抵触していないかを測る最も適切なゲージが羞恥の感情である」としている。い

ずれも羞恥が自己に偏りそうになった意識を他者に戻し、人間関係のバランスを取る上で重要な役割を果たしていることを示唆している。しかし「個」を重視する風潮が西洋から流入してくるにつれ、そのような羞恥の機能もあまり positive とはみなされなくなり、「個」を抑えるマイナスの作用ばかりが強調されるようになってきてしまった印象がある。

このように羞恥を negative なものとするところからも、対人恐怖は生じてきたのではないだろうか。森田（1953）によれば「恥ずかしがることをもって自らを臍甲斐無きことと考え」「恥ずかしがることを苦悩する病」であることが対人恐怖の特徴であり、そもそも恥ずかしがることで自分を駄目な人間だと思わなければ、葛藤は生じないのである。ちなみに永井（1994）は対人恐怖症的心性を三つの問題意識に分けて考えている。一つめは「対人状況における行動・態度」であり、“他者とうちとけた行動ができない”“人前で緊張する”等行動レベルにおける問題意識である。二つめは「関係的自己意識」で、他者から変な風に思われていないかその評価を気にし、他者との関係がどのようなものか計りかねて困っているというような悩みである。三つめは「内省的自己意識」で、自己の不安定さや劣等感の問題意識である。この中で対人恐怖を対人恐怖たらしめ、単なる内気や引っ込み思案と異にしているのは「内省的自己意識」ではないかと思われる。人目を気にし、他者とうちとけた行動ができなくとも、そのことで劣等感を抱かなければ、悩みは大きくならないのではないだろうか。

「個」を重視する風潮は、現代において更に強まってきているのかもしれない。そしてそのような風潮を受けてか対人恐怖の心性の減少が唱えられて久しく、数量的な検討も加えられている（田中、穂苅、福田、小川、1994）。また、症状にも、羞恥型とされる赤面恐怖が減り、おびえ内包型とされる視線恐怖が増加するという変遷が起きている。以前に比べ女性の対人恐怖症が増加しているというのも、もはや女性にとっても羞恥は美德ではなくなってきたことの現れであろう。しかし、元々場が基盤になっている風土の中で、場から切り離された「個」を確立しようとするのが、果たして西洋における「個」の確立と同じであるかどうかは疑問を持たざるを得ない。「個」の行き過ぎに伴うエゴイズムや自己愛の問題に加えて、自らの存在基盤を失う危険性が、日本の場合、よりクローズアップされてくるのではないだろうか。

ところで、対人恐怖は日本人に多いといわれているが、西洋でもやはり類似の問題が論じられている。日本の対人恐怖と類似の状態として、アメリカで社会恐怖（social phobia）と呼ばれているものがあるが、この状態を起こしやすい性格として忌避性パーソナリティ障害が挙げられている。DSM-IV ではその性格を「拒絶、屈辱、ないし羞恥に過度に敏感である」「極めて些細な非難の兆候にひどく心を傷つけられる。その結果、軽んぜられはしまいか、辱めを受けはしまいかと恐れて、親密な関係を形成する機会から自らを遠ざけるのである」と述べている。有病率はアメリカ合衆国では稀だが、イギリスでは日本と大差がないくらい高い数値が挙げられているとされている。また、主に社会心理学や社会学の方面から研究されていて精神科領域ではあまり注目されていないため、行動面に重点がおかれているが、やはり対人恐怖や羞恥感情と類似の概念として社会不安（Leary, 1983）やシャイネス（Cheek & Buss, 1981）の問題がある。アメリカで自分を何らかの形でシャイだと感じたことのある人は80%にのぼるという。日本のような他者志向を基盤とする文化で対人恐怖が問題になってきたのと、自己志向を基盤としてきたはずの西洋で類似した問題が論じられるようになってきたのとはほぼ同時期であり、興味深い点である。

また、羞恥の機能についても別の視点から論じられている。Broucek (1991) は、恥を失いつつあることの危険性について述べている。すなわち恥 (shame) には内面を隠す機能があり、恥が消失して内面を人前で表出することにためらいを感じなくなっていることが、人前で表出してもかまわない部分で自己の意識を固めるという点で、却って自己の客体化を招き、表面的で浅薄な意識を作っているのではないかと指摘しているのである。先の作田 (1967) の考えを引けば、常に“普遍者”としての意識しか持たなくなっているということになる。ここに、羞恥には、人間関係における「個」の行き過ぎを防ぐとともに、人間関係の客体化を防ぎ「個」としての関係を回復させる機能も備わっていることが推測できる。

対人恐怖の心性を手掛かりとすることで、自己志向と他者志向のバランスが対人葛藤や自己の劣等感にどのように関わっているかを見ることができると思われる。しかし対人恐怖の自他の二面性に関して、臨床場面からは論じられているものの、実証的研究は少ない。症状が固定化し、不適応に陥ってしまっている人の場合、通常は「個」の方は抑圧されて二面性は意識されなくなってしまうと考えられているからである。永井 (1994) は、森 (1983) の TSPS (二面性人格尺度) を用いて対人恐怖の心性の高い群と低い群とを比較し、高い群の方がより性格の相矛盾した二面性を意識的に許容していることを示し、更に、高い群の方が低い群よりも健全な自我を有していることを見出だしている。そして対人恐怖の心性の自覚があり、かつ社会適応性の高い人の場合、「対人恐怖的な葛藤なり悩みなりが、自己を確立していく上での気づきとして、自己に直面し、考えていこうとする建設的な自我の働き作用として顕在化している」のではないかと考えている。TSPS で測定される二面性は、自己と他者の二面性という視点とは異なるが、しかし関連する部分もあるだろう。すなわち、神経症レベルに陥っていない“適度の”対人恐怖的な葛藤は、自他の二面性を意識的に引き受けるとともに、自己あるいは他者に偏りそうになった意識のバランスを取り戻す上で、肯定的な働きをしているのではないだろうか。

目 的

本研究では、以上に述べたことをふまえた上で、対人恐怖の心性を手がかりとして、自己志向と他者志向という二つの志向性が、対人葛藤や自己の劣等感、不安定さなどにどのように関係しているかを検討することを目的とする。

方 法

《被検者》 関西にある私立の薬科大学の女子学生を対象に調査を行った。女子のみを対象としたのは、対人恐怖の心性、自他志向性とも男女において構造上の違いが予想されるためである。調査は授業時間を利用して、一斉に筆者によって行われた。回答に不備のあったものを除いた結果、255人が分析の対象となった。平均年齢は19.15歳 (SD 0.81) であった。

《測定用具》

- ① 自己関係質問紙 自己志向と他者志向の程度を測ることを目的として筆者が作成した。従来の自己志向の研究では、自己志向と他者志向は両立可能な独立した概念として扱われることが

多かったが、本研究ではあちらを立てればこちらが立たずというような、対人関係においてより葛藤の原因となると思われる側面に焦点を当て、以下のような基本概念を考えた。

〈自己志向〉自己を他者とは異なるものと考え、自己の感情や意志を重視し、また、それを押し通そうとする。他人よりも自分を優先させる態度を基調とする。

〈他者志向〉他者との円満な関係を重視し、場合によっては自分の意志を抑制したり、周りに合わせて態度を変える。自分よりも他人を優先させる態度を基調とする。

以上の概念を軸に、主に内沼（1977）の分裂病、躁鬱病、対人恐怖における自他の構造に関する記述、Gilligan（1977）の一体性－分離性の概念をもとに作成された山本（1989）のCS尺度、Snyder（1974）のセルフ・モニタリング尺度、伊藤（1995）の個人志向性・社会志向性PN尺度をもとに、項目の選択、作成を行った。自己志向、他者志向それぞれ22項目、計44項目からなり、7件法で評定を求めた。

② 対人関係質問紙 対人恐怖的心性を測定するために永井（1994）によって作成された質問紙であり、「対人状況における行動・態度」（以下、行動・態度）「関係的自己意識」（以下、関係自己）「内省的自己意識」（以下、内省自己）の3つの下位尺度から構成されている。各尺度とも14項目からなり、7件法で評定を求めた。

結 果

(1) 自他関係質問紙

各項目に1～7点を与え、主因子解による因子分析を施したところ、ほとんどの項目が第1因子に高い負荷を持ち、また、第1因子と第2因子以下の固有値の間にギャップが見られたため、ある程度一次元性を持った尺度であることが認められた（寄与率は21.8%）。また、正の負荷を持つ項目のほとんどが自己志向として選択された項目、負の負荷を持つ項目のほとんどが他者志向として選択された項目となっていたため、第1因子への因子負荷量が0.3に満たなかった項目を省いた上で、負荷が正の値を持つ項目を自己志向を表す項目（以下S尺度）、負の値を持つ項目を他者志向を表す項目（以下O尺度）として抽出した。その結果、自己志向項目、他者志向項目とも、それぞれ18項目が選択された。また、各尺度ごとに α 係数を求めたところ、S尺度は0.88、O尺度は0.86となり、ほぼ十分な信頼性が支持された。

次に、各尺度ごとに主因子解による因子分析を施したところ、やはりそれぞれある程度一次元性を持つ尺度であることが確認された（寄与率はS尺度：34.1%、O尺度：30.8%）。各尺度の構成内容を検討する目的でvarimax回転を施した結果、それぞれ4因子が抽出された（表1、2）。各因子の持つ性質について吟味したところ、S尺度については第1因子は「周りに流されることなく、自分の考えを断固として押し進めていく」という内容が、第2因子は「他者に合わせることを好まず、自分と他人とは別のものと区別して考える」という内容が、第3因子は「個性や本音を大切にすること」という内容が、第4因子は「他者のことはあまり顧みない」という内容がその中心を占めており、それぞれ「確固とした信念」「自他の区別」「本音の重視」「他者への非共感性」と命名した（以下、それぞれ、信念、自他区別、本音、非共感性因子とする）。O尺度については、第1因子は「本当の自分は隠して見せ掛けの自分を作る」という内容が、第2因

表1 S尺度項目因子分析結果 (varimax 回転後)

項 目	I	II	III	IV	共通性
27 自分が納得できないことには妥協しない	.735	.251	.090	.039	.612
28 自分の信念に基づいて生きている	.692	.087	.288	.156	.594
1 自分の気持ちや考えに基づいて行動している	.546	.043	.374	.202	.481
42 自分のことは自分で決めるようにしている	.506	.228	.335	-.039	.422
39 自分の権利ははっきりと主張する	.503	.150	.441	.119	.484
40 自分の気持ちは相手の気持ちには影響されない	.478	.094	.186	.218	.319
44 正しいと思うことは人に構わず実行する	.464	.143	.313	.218	.381
11 相手の感情に引きずられるようなことはない	.460	.203	.082	.258	.326
16 周りと反対でも自分が正しいと思うことは曲げようとしない	.430	.384	.125	.168	.376
24 人に合わせるよりはたとえ孤独であっても自由な方がいい	.143	.753	.014	.195	.626
31 他人と同じような考え方はしたくない	.124	.495	.053	.126	.278
35 自分は自分, 他人は他人だと思う	.078	.423	.259	.112	.265
26 自分が本当はそうだと思っていないことは言いたくない	.209	.313	.285	.086	.231
4 自分の個性や自分らしさを大切にしている	.322	.080	.585	.212	.497
37 本音で生きようと思っている	.205	.126	.575	.024	.389
6 何かするとき他の人がどう思うかはあまり考えない	.098	.178	-.008	.707	.541
7 人がどう思うかでなく, 自分がどう思うかを優先する	.281	.200	.310	.613	.592
23 周りのことは考えず, 自分の思ったままに行動することがある	.208	.367	.167	.515	.471
固有値	3,030	1,682	1,640	1,533	7,884
寄与率 (%)	16.8	9.3	9.1	8.5	43.8

表2 O尺度項目因子分析結果 (varimax 回転後)

項 目	I	II	III	IV	共通性
21 人前では見せ掛けの自分を作ってしまう	.843	.084	.075	.007	.725
3 人とうまくやっていくために本当の自分は隠している	.680	.024	.070	-.116	.481
18 人に嫌われないようにするために演技することがある	.664	.255	.038	.137	.526
33 状況や相手に合わせて自分を変えて振舞っている	.566	.212	.061	.139	.388
5 本当は楽しくなくても楽しそうに振舞うことがある	.459	.054	.240	.182	.304
8 周りに気兼ねして, 言いたいことを言わないでいることがある	.412	.244	.356	.074	.361
17 一人だけ違う意見を持つと不安になる	.078	.700	.165	.169	.552
36 周りと違う行動をしてしまわないかと気になる	.248	.641	.031	.250	.535
32 人に何か言われると, 意見を変えてしまうことがある	.173	.631	.124	.035	.445
15 何かする場合, 周りに合わせることが多い	.266	.531	.332	.145	.484
13 何かを決めるときには, 他の人に相談しないと安心できない	.021	.438	.105	.230	.257
12 自分のことより他人のことを優先する	.026	.184	.710	.128	.555
9 何かするときには他人の気持ちをまず考える	.074	.013	.625	.188	.432
41 人と折り合えそうにないときには, 自分が折れて争いは避ける	.254	.211	.395	.168	.293
10 集団内の取り決めには, 内心どう思っているでも従う方だ	.185	.295	.391	.137	.293
2 周囲とは常に円満な関係でいたい	.059	.233	.204	.640	.509
20 周りとの調和を重んじている	.087	.202	.436	.639	.647
38 多少自分を抑えても, 今いる集団から離れたくない	.092	.349	.149	.473	.376
固有値	2,608	2,337	1,821	1,396	8,162
寄与率 (%)	14.5	13.0	10.1	7.8	45.3

子は「周りに合わせて自分の行動を決める」という内容が、第3因子は「自分のことよりも他人や集団のことを第一に考える」という内容が、第4因子は「周囲との調和を重んじ、関係の維持を重視する」という内容がその中心を占めており、それぞれ「仮面性・演技性」「場への埋没」「他者の優先」「調和志向」と命名した（以下それぞれ、仮面、埋没、他者優先、調和因子とする）。これらの因子を各尺度の下位尺度として以下取り扱うこととした。

(2) 対人関係質問紙

各下位尺度ごとに1～7点を与え、それぞれの尺度の得点とした。各尺度間の相関係数を求めたところ、いずれの尺度も高い相関関係にあることが確認された（表3）。

表3 対人関係質問紙各下位尺度間の相関

	行動・態度	関係自己	内省自己
行動・態度	/	.53***	.55***
関係自己		/	.69***
内省自己			/

***p < .001

(3) 自己志向・他者志向と対人恐怖的心性

SO両尺度及び各下位尺度ごとに得点による3分割を行い、それぞれの高群（H群）、中群（M群）、低群（L群）とした。まず、対人関係質問紙の各下位尺度の得点について、それぞれ3（S尺度：H, M, L群）×3（O尺度：H, M, L群）の2要因分散分析を行った。結果を表4と図1に示す（下位検定はDUNCAN法による。以下も同様）。ここに見られるように、対人恐怖的心性のいずれの問題意識も、自己志向が弱い場合と他者志向が強い場合において強くなっていた。ただし、「行動・態度」と「内

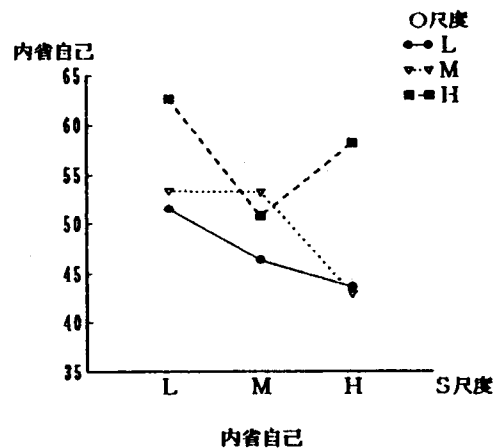
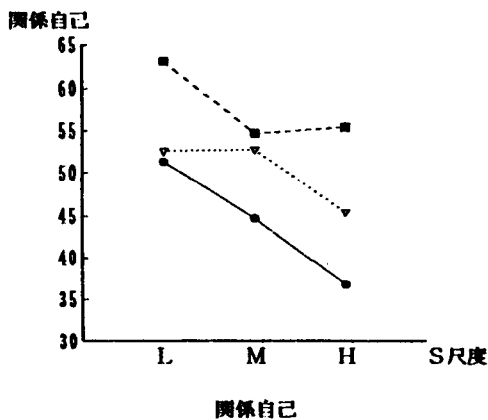
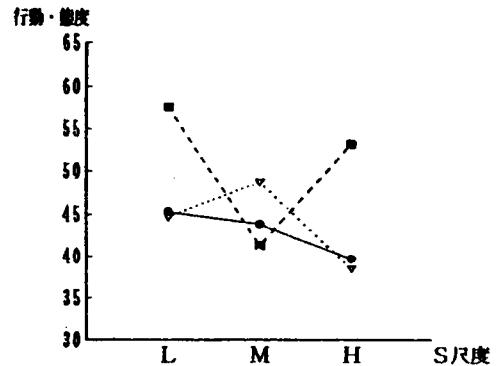


図1 対人関係質問紙下位尺度のS・O尺度各分位群における平均

表4 対人関係質問紙下位次元の得点のS・O尺度の分位群間による分散分析

S	L			M			H			分散分析（F 値）		
O	L	M	H	L	M	H	L	M	H			
n	5	30	48	29	41	20	53	16	13	S	O	交互作用
行動・態度	45.20	44.63	57.54	43.79	48.80	41.30	39.68	38.56	53.31	2.93*	4.95**	4.06**
	10.18	12.54	17.56	12.95	14.30	17.92	16.18	16.65	17.07	L>M, H	L, M<H	
関係自己	51.40	52.63	63.19	44.62	52.78	54.70	36.74	45.38	55.46	9.56***	22.42***	1.36
	8.76	10.03	12.91	10.54	12.13	13.80	12.85	17.02	12.74	L>M>H	L<M<H	
内省自己	51.60	53.40	62.71	46.41	53.37	50.85	43.72	42.88	58.15	5.91**	9.56***	2.65*
	9.91	9.75	14.40	11.91	11.17	14.93	13.82	16.58	11.38	L>M>H	L<M<H	

上段：平均値 下段：標準偏差 ***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

表5 S・O下位尺度の分位群別に見た対人関係質問紙下位次元の得点の平均値と分散分析

S 尺度							分散分析 (F 値)	
		L	M	H				
行動・態度	信念	53.84(16.75)	44.68(15.00)	40.95(16.20)	13.61***	L>M, H		
	自他区別	46.63(18.76)	44.69(14.58)	49.45(17.88)	1.74			
	本音	54.27(17.14)	47.58(14.46)	38.64(16.33)	17.38***	L>M>H		
	非共感性	47.53(17.51)	47.79(16.94)	43.33(15.36)	1.83			
関係自己	信念	57.00(14.86)	50.55(12.36)	42.76(15.78)	19.33***	L>M>H		
	自他区別	53.19(15.39)	50.98(14.19)	45.82(16.09)	4.28*	L, M>H		
	本音	60.02(14.84)	50.48(13.33)	42.41(13.78)	27.49***	L>M>H		
	非共感性	57.18(14.09)	52.45(13.92)	41.20(13.93)	24.63***	L>M>H		
内省自己	信念	59.68(13.74)	49.87(12.92)	45.71(13.86)	22.27***	L>M>H		
	自他区別	53.74(14.73)	50.34(14.30)	52.08(14.75)	1.23			
	本音	59.30(14.01)	51.20(13.16)	46.56(14.64)	14.53***	L>M>H		
	非共感性	54.17(15.18)	52.60(13.76)	48.24(14.80)	3.27*	L, M>M, H		

O 尺度							分散分析 (F 値)	
		L	M	H				
行動・態度	仮面	41.08(14.20)	44.89(15.12)	56.84(18.07)	19.78***	L, M<H		
	埋没	40.87(15.43)	47.74(15.95)	50.45(17.56)	7.23***	L<M, H		
	他者優先	42.00(14.10)	46.70(17.37)	49.36(16.99)	3.48*	L, M<M, H		
	調和	49.64(13.77)	45.79(16.85)	44.91(18.28)	1.50			
関係自己	仮面	42.75(13.36)	49.85(12.41)	60.05(14.76)	38.76***	L<M<H		
	埋没	40.84(13.99)	51.01(13.73)	59.05(12.58)	35.62***	L<M<H		
	他者優先	44.46(14.14)	49.88(15.50)	55.15(14.07)	9.22***	L<M<H		
	調和	46.22(13.05)	49.35(15.02)	54.82(16.08)	5.93**	L, M<H		
内省自己	仮面	46.75(13.98)	50.51(13.02)	60.94(13.60)	21.05***	L, M<H		
	埋没	43.89(13.61)	51.99(12.27)	59.40(14.16)	26.05***	L<M<H		
	他者優先	49.53(12.33)	50.74(14.93)	54.63(15.23)	2.60+	L, M<M, H		
	調和	50.61(13.04)	51.15(13.15)	53.36(17.49)	0.75			

() 内は標準偏差 ***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

省自己」の問題意識は、O尺度H群において、LHとHHに比してMH（アルファベットは左側が自己志向の、右側が他者志向の分位群を表す。以下も同様）の得点が低くなっており、他者志向が強くても自己志向が中程度の場合には、これらの問題意識は強くないことが確認された。

次に、対人関係質問紙の各下位尺度の得点について、SO尺度下位尺度の分位群間の差の検定をするために一要因分散分析を行った（表5、6）。その結果、全体的にS尺度の下位尺度の得点が低くてO尺度の下位尺度の得点が高いほど、対人恐怖的心性が高くなることが確認された。ただし「行動・態度」と「内省自己」では、S尺度の自他区別因子とO尺度の調和因子において有意差が認められなかった。また「行動・態度」ではS尺度の非共感性因子においても有意差が見られなかった。

考 察

(1) 自他関係質問紙について

本研究では、自己志向尺度と他者志向尺度とは互いに負の相関関係にある項目から構成されている。これは、他人を抑えて自分を出すか、それとも自分を抑えても他人を取るかという、あちらを立てればこちらが立たずというような、より葛藤を引き起こす原因となる概念を扱ったためである。これらを一つの尺度として取り扱った場合、HHは得点の上ではMMと同一とみなされるが、自己志向と他者志向を別の尺度に分けて考えることで、両高型に特有の構造が検討可能になったと思われる。また、相関関係の全体の傾向を考えると、HLやLHはそれだけ内部の構造に矛盾を含んでおらず、自他葛藤という点では、葛藤は少ないと考えられる。

(2) 対人関係質問紙について

3つの下位尺度はそれぞれ異なる構造側面を表していると考えられるが、これらが互いに高い相関関係にあるということは、「他者が自分に否定的な評価をするのではないか」「自分は他者を不愉快にしているのではないか」という関係的自己意識の悩みが、「他者とうちとけた行動ができない」という問題意識を引き起こし、更に「自己の不安定さや劣等感」という内省的自己意識につながっていってしまうためではないだろうか。いずれも劣等感の悩みと高い相関を示したということは、対人恐怖的心性の「他者を気にする」という側面がやはり negative なものとして捉えられやすいことを示していると思われる。

(3) 自己志向・他者志向と対人恐怖的心性について

自己志向の中で、対人恐怖的心性に主に影響を与えているのは信念因子と本音因子であった。自己の個性や本音を大切に、それらを断固として押し進めていこうとする態度が、対人恐怖的心性を弱める働きをしていると考えられる。一方、他者志向の中で対人恐怖的心性に影響を及ぼしているのは主に仮面因子と埋没因子である。周囲に合わせて行動を決定しないと不安なために、本音を抑えてその場その場で振る舞い方を変えてしまうという態度が、対人恐怖的心性を強めていると考えられる。これらはどちらも、意志決定や自己主張の強さ弱さと関連していると思われる。「他者から否定的に思われてはいないか」という関係的自己意識が、何か思っているも他者

を気にしてそれを主張できないという態度となって現れ、そのために他者とのうちとけた行動もできず、そんな自分に劣等感を感じてしまう、という構造があるのではないだろうか。劣等感につながってしまうのは、一人で意志決定や自己主張ができるか否かということが、現代社会の風潮としてかなりの評価的な観点を含んでいるためではないかと思われる。

同じ自己志向の内、自他区別因子と非共感性因子に表される態度は、「関係的自己意識」を弱める働きはあるが、「対人状況における行動・態度」とは関連が認められなかった。これらの因子に表されている態度は、自己志向の自分の本音や信念を押し通していくという態度を支える側面も持っている。他者の反対に出会うたびに相手はどう思っているのかと気にしては、自分の意見は貫徹なくなるかもしれない。また、多数決で物事が決定されることも多い世の中では、自分だけ違う意見を持つと、他者との対立どころか下手をすれば集団からの排除も免れかねないが、そのような時にそれでも自分の意見を曲げないためには、「私は私なのだから、人に合わせるよりは孤独な道を選ぶ」という一匹狼的な生き方をするしかないこともありえよう。このような態度は、他者から受け入れてもらえなかった自分の自己評価を保つために、ある程度プラスの働きをしていると考えられる。しかし、他者とうちとけた行動をすることは当然難しくなってくるであろう。それに自他区別が高くても「内省的自己意識」が下がらないことから考えても、独自性の追求も周りの支持を得られなければ自己の不安定さにつながり自己評価を下げてしまう可能性がある。そうすると結局は対人葛藤を生み出す一因となってきてしまうのではないだろうか。

他者志向の調和因子も、「対人状況における行動・態度」や「内省的自己意識」の悩みとは関連が薄くなっている。他者志向の強い人が、仮面因子や埋没因子に見られるような態度を示すのは、根底に周囲との円満な関係や調和を望む気持ちがあるからであろう。それゆえに相手の出方に気を使ってしまい、思うように行動できなくなる側面があることは否めないが、そもそも円満な関係を望まずに周囲とうまくやっていくことは難しいといえよう。このような態度は決して劣等感を生みだすものではない。他者優先因子と内省的自己意識の関連が弱いのも、他者優先が他人を思いやり、円満な関係を目指すゆえの態度であるからであろう。従って、他者志向は全体的には対人恐怖の心性を強める働きをしているものの、その他者志向の一側面を担っている調和を求める態度は、対人関係を保つ上で肯定的な働きを有しているとはいえないだろうか。

自己志向の自他区別や非共感的な態度と他者志向の調和志向や他者優先の態度とは、他者との対立があった際に、他者に合わせることを拒み周囲から分離するか、それとも周囲に合わせて一体性を求めるかという側面を表していると思われる。この分離か一体かという態度は、内沼(1977)が分裂病と躁鬱病について論じた対自性優位・対他性優位の気質とも関連してくると思われるが、筆者はこの分離の態度に社会恐怖やシャイネスの問題が推測できないかと考える。自己志向が強い場合、周囲の反対にあって自己主張が通用しなくなったとき、他者との円満な関係を放棄して、他者から離れていこうとする側面が表に出てくる。しかし他者に受け入れられたい、嫌われたくないという他者志向の一体性の側面が失われなければ、それは対人葛藤という形で現れてくる可能性がある。また、自他区別に見られるような個別性や独自性の過度の重視は、他者と異なりたいという点において他者を意識するという皮肉な逆転を生みだしかねず、他者に左右されない態度に必ずしもつながるとは限らない。しかも自分の行動に対する支持も得られず、自分の行動を確かめる基準も失うことになる。結局対人状況における緊張につながってしまうかも

しれない。もちろん自他区別や非共感性因子の得点の高さは対人恐怖的心性の“高さ”につながっているわけではないので、あくまで推測の域を出ないが、日本のように他者志向を基盤とする中で自己志向を感じ始めたときに生じるのが対人恐怖なら、西洋のシャイネスや社会恐怖は自己志向を基盤とする中で他者志向を感じたときに生じてくるのかもしれない。自他の意識の狭間に立たされて生じる葛藤をそれぞれ反対側から見ているとはいえないだろうか。

以上のことを考慮に入れつつ、自己志向と他者志向の全体的な相互作用について考察する。「関係的自己意識」は、自己志向が弱くて他者志向が強いほど高まることが確認された。これは因子別の考察でも述べたように、他者を立て、他者と円満な関係を築いていこうとすれば、相手からどのように思われているかを気にしないわけにはいかず、また、他者からどう思われているかを気にするがゆえに、思うように自己主張ができなくなってしまうという構造を表しているのではないだろうか。しかし、他者志向が強くても、適度の自己志向を有していれば、それが「対人状況における行動・態度」や「内省的自己意識」の問題意識にはつながっていかない。これらの問題意識にも影響を及ぼし、「恥ずかしがることをもって自らを臍甲斐ないものと考え」る対人恐怖的心性の特徴がよく現れているのは、他者志向が強くて自己志向が弱い場合、あるいは他者志向と自己志向がともに強い場合である。前者のような他者志向への偏りは、対他性優位な気質を前提としているが、躁鬱病の病前に対人葛藤が見られないのとは異なり、葛藤が意識化されていた。しかしこの葛藤は、対人恐怖のように等価的な価値を持つ自己と他者の間で振り回されてしまう葛藤とはやや質が異なるように思われる。むしろ、躁鬱病の病前と同じく対他性優位な気質を有しながらも、他者に拒まれる不安と強い対人希求とを合わせ持つために種々の対人葛藤に悩むことになるといわれる、抑鬱神経症に近い構造をもっているのではないだろうか。すなわち、他者から拒まれるのを恐れるために自己主張を抑える側面が強調されることになり、相手の言いなりになるか複数の他者に振り回されるといった態度が形成される。そこから、人と自然に付き合えないという気持ちを抱き、そういった自分をnegativeに捉えてしまう構造が生じているのではないだろうか。しかしこの場合は対人葛藤を感じたときには自分を抑えるという方略がある程度決まっているため、「うちとけた行動」は難しくともとりあえず集団から排除される危険性は少ないといえる。一方後者は前者とは異なり、「自分を取るか他人を取るか」という、より対人恐怖的な葛藤に立たされることになる。そして自分も他人も裏切らないために、自己志向の自他区別の側面を強化して、対人関係から引きこもるというパターンを形成してしまうのかもしれない。従って、とすると集団から出ていかななくてはならない、あるいは最初から入れないというところで悩みが生じているともいえよう。自己の信念を押し通す態度と他者から離れていく態度とは、どちらも自己志向を補い合っていると考えられるが、しかしこの二つの態度を考えた場合、自己志向は適度である方が、安定した自己評価を維持できるとも考えられる。

以上のことから、対人葛藤や劣等感、不安定さなどは、自己志向と他者志向の相互関係によって影響を受けることが確認されたといえよう。自己志向ばかりが強くて対人恐怖的な葛藤が表面化してきていない場合にも、他者や社会を無視できないような状況に立たされたときには却って不適応に陥ってしまう危険性を含んでいるとも考えられる。

ま と め

自己志向と他者志向は、それぞれ対人関係を安定させる側面と対人葛藤を引き起こす側面の両方を有していることが推測された。明確な対人恐怖的心性は減少してきているとはいえ、対人葛藤の悩みを抱いて臨床家のもとを訪れる人の数は決して減ってきたとはいえない。そこには自己志向と他者志向の複雑な絡まり合いがあり、単純に羞恥を排除して個を主張する態度を強くすれば解決するという問題ではない。自己志向が強まっても、それが周囲との対立を招くと結局は社会恐怖や対人恐怖に類似する問題に還ってってしまう可能性も捨てきれない。このことは羞恥を失いつつある現代社会への一種の警告とは受け取れないだろうか。臨床とも結び付けながら今後更に検討を重ねる必要があるだろう。

文 献

- Broucek, F. J. 1991 *Shame and the Self* The Guilford Press.
- Ceek, J. M. & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Gilligan, C. 1977 In a different voice: Women's conception of the self and morality. *Harvard Educational Review*, 47, 481-517.
- 伊藤美奈子 1993 社会志向性・個人志向性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究 64, 115-122.
- 伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性 P N 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究 13, 39-47.
- 梶田勲一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 木村 敏 1976 いわゆる「鬱病性自閉」をめぐる 笠原嘉(編)躁うつ病の精神病理 1 弘文堂
- 木村 敏 1978 自覚の精神病理 自分ということ 紀伊国屋書店
- 木村法子 1983 対人恐怖についての一考察——T A T に表された自己と他者を通して—— 京都 大学教育学部紀要 29, 134-144.
- 近藤章久 1970 対人恐怖について——森田を起点として—— 精神医学 12, 22-28.
- Leary, M. R. 1983 *Understanding Social Anxiety* 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology* 3, 551-558.
- 森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性の測定の試み 心理学研究 54, 182-188.
- 森田正馬 1953 赤面恐怖の治し方 白楊社
- 永井 徹 1994 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- 作田啓一 1967 恥の文化再考 筑摩書房
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior *Journal of Personality and Social Psychology* 30, 526-537.
- Snyder, M. 1987 *Public appearances and private realities* NY: Freeman & Company
- 田中康裕・穂苅千恵・福田 周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究 12, 121-131.
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学 弘文堂
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究——青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討—— 教育心理学研究 37, 302-311.

(博士後期課程 2 回生、臨床人格心理学講座)